

文藝作品：

年甲斐もなく

In Spite of His Old Age

川 崎 清

1

川浪博がその手紙を投函するために家を出ると雨が降ってきた。通り雨と思ひ傘を持たずに濡れるままに歩いていくと昂^{たかぶ}った気持ちが鎮まり、川浪は手紙を書いた経緯^{いきさつ}をあらためて振り返った。一昨日、五月の連休明けに同僚の瀬川^{ひさよし}尚義教授の強い勧めで見合いをしてきたのだ。話があってから見合いまでの三週間、今更なぜ伴侶を求めるとか自問してきたが、明確な答えを見い出せないまま見合いの席に行ってしまったのだ。

川浪は六十九歳で現在独身だが、以前高校教師をしていた時、別の高校の国語教師と結婚していた。しかし、三年後に「あなたは女を理想化しすぎなの。もうそれに合わせているのに疲れてしまったから別れてください」と言われて、やむなく別れたのだ。以来、女を理想化するのは自分の心のどのような側面をいうのか考えてきたが、よく分からないままであった。

瀬川教授は川浪より六歳若く、良識も学識もあり、家庭を持つことの良さを体現する人物であった。瀬川は川浪が定年を迎えると、その後は一人暮らしの侘^{あど}しい余生^{わび}になるのを気の毒に思ひ、見合いの話^話を川浪に持ち掛けたのだ。相手に選んだ女性は瀬川の高校時代の同級生で、有力私大を出て総合商社に就職し職場結婚をしたが、五年後に夫の背信が原因で離婚した女性であった。幸いその結婚での子供はいなかった。現在六十三歳で自宅の一部を教室にして学習塾を経営し、経済的には心配のない人であった。

2

川浪は相手の女性の印象をすぐに瀬川に知らせるよう言われていたので、以下の短いメールを瀬川に送った。

瀬川 尚義 先生

お世話になっております。

瀬川先生には小生の行く末をご心配いただき、この度新山登志子様という素晴らしい女性と出会う機会を作っていただきました。誠にありがとうございます。瀬川先生ご夫妻ご臨席のもと、新山様とお話し、その飾らない誠実なお人柄に触れて、強く心を惹かれました。私としては、できれば互いに理解を深め合える場を再度いただければと思っております。瀬川先生

2021年10月25日受理

には私のこの気持ちをまずは新山登志子様にお伝えいただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。新山様には私からも日を置いてお手紙を差し上げたいと存じます。

どうかよろしくお願ひ申し上げます。

川浪 博

川浪はこう書いたものの実は新山登志子と付き合っているものか分からないでいた。川浪は見合いをする前は今後も一人で生きていこうと思っていたからだ。それ故このメールの文面は瀬川の見合い設定の骨折りをねぎらうためにしたためたものであった。しかし書いた今となっては「互いに理解を深め合える場を再度持ちたい」と本心から書いた気もしてきて、自分でも分からなくなっていた。結局、新山登志子には以下の文面の手紙を書き、それを投函しようと家を出て、通り雨に降られているのであった。

新山 登志子 様

先日はとてもお忙しい時期にもかかわらず、面会するお時間をとっていただき、誠にありがとうございました。また、私が余計な気遣いをしないで済むように進んでご自身のことをいろいろとお話いただき、お陰様で新山様のことがとてもよく理解でき、初めてお会いしているのに、何十年も前からの知り合いであったような気持ちでお話をすることができました。新山様がお一人で暮らすようになった事情や、その後の暮らし向きのことなど、普通はお見合いの席では話題にしないことも含めてざっくばらんにお話くださったので、私も気取ることなく自分のこととお話することができました。

あの後、新山様のお話をもう一度思い返し、いろいろと考えてみました。そうしますと新山様のお考えと私の考えとを今少しお互いに細かく伝え合い、理解を深めることが必要ではないかと思えてまいりました。可能であれば、今一度ご都合のよろしい時にお会いして、お話できれば幸いに存じます。学習塾ですと毎日の午後、特に金曜日と土曜日は生徒さんも大勢通ってきてお忙しいと思います。ですので、火水木の午後一時から四時頃までということで、いずれかの曜日をご指定いただきましたら、新山様のお住いの近くで場所を探したいと思いますがいかがでしょうか。

お返事は時間を短縮するために下記アドレスにメールを送信いただければ幸いです。勝手なことばかり申し上げることをお許しください。 ekozuki69@yahoo.co.jp

よろしくお願ひいたします。

川浪 博

新山登志子は川浪の手紙を読み、再来週の火曜日午後一時に雑司ヶ谷鬼子母神の境内で待ち合わせる提案をメールでしてきた。そこは新山の自宅から近く、川浪にも分かりやすい場所ということだった。川浪は相手はその気になってくれたことが嬉しかった。また、思った以上の

速い展開に気持ちが^{たか}昂ぶり、自分でも驚くほどいそいそと目白通り沿いで行われる催事を確認し、帰りに立ち寄るカフェなども決めて、デートプランを周到に立てていた。

3

火曜日になった。二人は鬼子母神の境内で落ち合い、そこから徒歩二十分ほどの「永青文庫」に行き「良寛」展を鑑賞した。その後、近くのホテル椿山荘まで歩いて、その三階にあるラウンジ喫茶に入った。幸い日本庭園を見渡せる席が空いていて、そこに座り向かい合った。

「いやあ、今日の展示を見て、やっと良寛のことが少し分かりました。実は、一茶と一部分ごっちゃになってたんです。この二人は生きた時期がほぼ同じなんで、つい混同しちゃって」

「川浪先生もそうだったんですか。わたしの理解も瘦せガエルやハエの句を詠んだのが一茶で、手^{てまり}毬の歌が良寛さんだったかなって、そのくらいなんです」

話の口火を切ってみたものの、川浪は少し不安になっていた。展示を観てみれば、良寛は生涯寺を持たず、妻子も持たずに暮らした人なのだ。だから、その暗示するものが見合い相手と連れ立って見学する展示としてはふさわしいものかどうか今となっては測りかねていた。案の定、新山登志子は核心を突く発言をしてきた。

「良寛さんは生涯独身でいらしたのね。晩年には四十歳も年の離れた^{ていしんに}貞心尼と歌を遣り取りなさってらっしゃるけど、お二人は清らかな師弟関係でいらしたんですね」

川浪には新山のことがやや癢に障った。良寛が独身で、貞心尼との関係も色恋関係ではなく、さわやかな師弟関係であるといの一番に指摘したからだ。その言い分は川浪が新山と会ってこうしていることを何か下卑^{そこい}た底意のある行動だと糺弾しているようにも思えたのだ。しかし、川浪はまずは当たり障りのない発言をすることにした。

「良寛さんは物欲、名誉欲、色欲を捨てて、生涯を清貧に甘んじて生きたんですね。言うまでもないけど、そんな生き方は私にはとてもできっこないなあ」

「まあ、そんなに卑下なさる必要はありませんわ。いつも思うんですけど、普通の人は良寛さんみたいな聖人の真似をしなくてもいいんじゃないかしら。度を超えなければ、いろんな欲望に身を任せて悩んだり苦しんだり、怒ったり泣いたりしても、それはそれでいいんじゃないでしょうか。それなら、聖人のように生きられない自分の弱さが分かって、聖人に対する敬意を忘れないようになりますでしょ」

川浪は新山が自分の凡夫ぶりを^や擲^ゆしてくるのかと身構えていたが、新山の意見がかなり寛容なのを知って意外の感に打たれていた。とりあえず話が噛み合うように返事をした。

「新山さんがそうおっしゃってくださると、頭が煩惱で一杯の私など大いに救われますね。ほっとして嬉しくなっちゃいますよ」

「あらっ、何も努力しない人を弁護するつもりはありませんわ。少なくとも自分の煩惱と精一杯戦って、やっぱり欲を捨て去ることはできないって悟るような人じゃないと弁護なんかしません。だって、そういう真面目な老若男女が大勢いて初めて聖人が聖人として生きられるって思いますもの」

「なるほど、聖と俗はともにこの世には必要ってことなんですね。新山さんと向かい合っていると、いつの間にかとても深遠な話をしていることに気が付くなあ。いやあ、勉強になります」

このことばに嘘はなかった。新山の話しぶりには知性が溢れ、ことばの端々に健全で温かい人間味も感じられるので川浪は新山の話し声に聞き入っていたのだ。

二人はこの後肩の凝らない話題を選んで良寛展の感想を述べ合い、入店から四十分ほどしてラウンジ喫茶を後にした。来た道に戻るのだが、目白通りは銀杏並木の鬱蒼と茂った葉に日差しを遮られて薄暗く人通りもまばらで、都心にいるとは思えないほどの深い静寂があたりを支配していた。二人はゆっくりと歩を進め、再び鬼子母神の境内に戻ると、そこで別れた。

川浪は新山と別れてから今日のことを振り返った。新山と一緒に過ごす時間は一人でのよりもやはり格段に楽しかった。その心地よい余韻に後押しされて翌日の午後には昨日の礼とともに、次週火曜日の午後にまた会えないかと書いて新山にメールを送信していた。気の利いたことを書こうと文面を三回も書き直したが、結局時間と場所を指定しただけの文面になった。

4

約束した火曜日になり、川浪と新山登志子は前回と同じく鬼子母神の境内で待ち合せて、それから近くの東京音楽大学に向かった。新山の塾での教え子が今ではその音大のフルート専攻の学生になっていて、近々学内の演奏会に出るといふ。一度演奏を聞いて欲しいと頼まれて、新山はその約束を果たすのに丁度よいからと、この音大行きを申し出たのだった。

二人はその学生の演奏を聞いた後、小ホールやピアノ練習室などを覗きながら学生食堂に行った。食事時ではないせいか学生がちらほらといるだけで話をするには都合がよく、窓辺に並んだ白い丸テーブルの一つに席をとり向かい合って座った。新山が会話の口火を切った。

「わたし二回目のお誘いはないって思ってたんです。だから誘っていただいてとても嬉しいわ」

「私もこうして一緒に時間を過ごせる幸せを噛みしめています。メールを差し上げる前は誘っても断られるんじゃないかって心配でソワソワしてたんですよ。まるで高校生に戻ったみたい焦っちゃって」

川浪は新山の気持ちを損ねないようにことばを選んで口にしていた。

「川浪先生、なんかわたしたち波長が合ってるみたいね。時間をかけないでそれが感じられるって、とてもすごいことですわ。瀬川君、あっ、瀬川先生とわたし高校で一緒だったでしょ、それで今でも君付けて呼ぶんですけど、瀬川君にこの話どうするのって聞かれて、もう少し川浪先生とお話ししてから決めさせてって答えてあるんです。だから、川浪先生のこともっといろいろ知りたいわ」

ズバリと核心に切り込まれて川浪は慌てたが、同時に嬉しくもあった。また、自分の気持ちを飾らずにまっすぐに伝えてくる新山に好感を持った。新山が更にことばを続けた。

「それに、わたしたち当分はこうして外でお会いして、いろいろお話することでもいいと思うんです。勿論、お互いの住まいに行って、一緒にお食事をすることもありだと思います。でもお

食事をして楽しくお話ししたら、訪ねた方が自分の家に帰るんです。どうかしら、こういうの」

川浪は話の進展が思ったよりもずっと速いのに驚いてすぐには答えられずに、新山の顔をしばらく見つめていた。ことばを探るようにしてやっと返事をした。

「私は古希に手が届く年齢だし、新山さんも還暦を超えてるし、十代や二十代の人みたいには振舞えないですね。つまり今の気持ちだけで一気に燃焼してしまうってわけにはいかない…なんて言ったらいいのかな……触れ合い…を求めるよりも…魂……魂を優しくいたわりあうことを求めているってことなのかなあ、うまく言えないけど…」

川浪は最初の言いよどみのことばを呑みこんでしまった。「体の触れ合い」と言おうとしたのだが、とっさに躊躇われたのだ。それはやはり年齢相応の慎みを見せようとした結果であった。

直後に川浪は自己嫌悪に陥っていた。欲念を糊塗するためにことば遣いに腐心する自分が情けなかった。というのも、新山は川浪のことをもっと知りたいと率直に言い、互いの家を訪問し合ってお互いをよく理解しようと悪びれずに提案もして、再婚話に乗り気なのを少しも隠そうとしていないからだ。川浪は新山のその大らかさに感嘆し敬意をすら抱いたのだった。また同時に、うわべを聖人君子らしく見せかけようとあくせくするのはもうやめようと思った。このようなことに思いを巡らせているうちに川浪は我知らずむっつりと黙り込んでいた。

5

その沈黙を解いたのは新山のことばだった。

「魂を優しくいたわりあうこと、本当にそう思いますわ。人間には魂があって、お互いに高め合える魂をずっと探し求めているんです。そこが本能で動く動物とは違うと思うんです」

川浪は先ほど自分の偽善的態度を反省したので、反動で露悪的に振舞いたくなっていた。

「正直に言うと、私は本能に駆られて新山さんと会いたって思いました。つまり…欲望に駆り立てられて異性の方と付き合いたくなかったです。私は動物と代わりがないんですよ」

新山は川浪の発言を聞いても特に驚いた様子も見せずに、すぐにことばを返してきた。

「川浪先生って、悪ぶるのがお好きなんですね。それならわたしだって、本能に突き動かされて先生と会ってるんですわ。それに、わたしが川浪先生の欲望を駆り立てることができたなんて、わたしにとってはとても名誉なことですし、嬉しいわ」

川浪は新山の知的な話しぶりにあらためて舌を巻いていた。新山は自分を貶めるようなことを言っても決して下品にならないのだ。

「でも人間は魂…高め合える魂を求めるんですよね。私は本能から異性を求めるんだけど、新山さんが私と同じように本能で異性を求めるんじゃ、魂から出発するっていうさっきの話と矛盾するんじゃないですか？」

川浪は揚げ足をとるように意地悪く言ったが、新山は少しも動ぜずに静かに答えた。

「異性が惹かれ合うって、魂の働きとも言えるんじゃないやありません？川浪先生の方がずっとお詳しいと思いますけど、プラトンの『饗宴』に、人間はもともと男女が二身一体で結合してたって話がありますでしょ。アンドロギュノスって言いましたっけ。ゼウスの怒りを買って、二身一

体を引き裂かれ、男女が別々の体になってしまう。それ以来お互いにもとの相手を求め合うんですよね。その求め合う気持ちがエロスっていう話でしたけど、わたし、エロスは本能の働きでも魂の働きでもあるって思うの」

川浪は新山が丁々発止と議論に乗ってくる様子を好ましく思った。そこには人を論破しようという才走った口調はなく、人の見識を引き出そうとする善意の声調が感じられたからだ。

「あっ、新山さん。すごいな、プラトンを引いてくるなんて。そう、確かに、私もエロスは本能の働きでも魂の働きでもあると思う。だから、人間の性愛は生殖だけが目的じゃないんだ。魂のやすらぎって言うのかな、そういうものを求めることも性愛の目的になるんだと思います」

「魂のやすらぎって、何がどんなふうによすらぐんですか？川浪先生、そこんところ、もう少し解説していただけます」

川浪は新山の要求に応じると、自分の欲望のありようを開示してしまうようで恥ずかしかったが、ここでお茶を濁すと新山の損得抜き率直さを裏切るような気がしたので思い切って説明を始めた。

「魂のやすらぎって、人間は、いや、私の場合だけど、自意識を放棄した時とか自意識から解放された時に感じるんです。相手からどう思われてるか、自分はできる男と思われてるか、それとも無能で意気地なしと思われてるか、自意識があると四六時中そんなことを気にしてるんですよ。そういう戦々恐々とした自意識から解放されて、ありのままの自分を受け入れてもらえる時、この上もない深い悦びとやすらぎを感じるんです。それが人間が求めるエロスの本質だと思うんだけど、どうかなあ」

川浪は一気にことばを言い連ねたが、つじつまが合うことを言っているのか自分でも分からなくなっていた。

「よく分かりましたわ。自意識を捨てて、ありのままの自分をさらけ出しても受け入れてもらえる時、人は安心して深い悦よろこびを感じる…それを魂のやすらぎって言うんですね」

新山の要を得たまとめを聞いて、川浪は自分が理解されたことを悟り、それこそ自意識でカチカチになっていた緊張から一気に解放された。新山も川浪の筋道立った話しぶりに深く感じ入り、説明に納得したのだった。

その時授業の終了を知らせるチャイムが校内に響き渡った。

「あら、もうこんな時間なの。時が経つのをすっかり忘れちゃったわ」

「塾の生徒さんが来る時間ですよ。じゃ、今日はこれで帰りますか」

川浪は今日随分と饒舌だったが、デートが終わろうとする今となって気分は沈みがちであった。いつもの癖で、先のことを悲観的に考えてしまうからだった。今この再婚話を進めて新山と暮らすようになって、先々長くて十五年生きるだけだろう。エロスのあるやすらぎのためにわざわざあらためて他人と暮らしても却かえって心労の種を作るだけではないのか。そんな思案が頭に去来するのだった。鬱々とした物思いにふけていると新山の声が聞こえた。

「川浪先生、今度はわたしからお誘いしてもよろしいかしら。ちょっと間が空きますけど再来

週の火曜日にまた鬼子母神まで来ていただけます？先生をご案内したいところがあるんです」
「それは面白そうだなあ。勿論いいですよ。そのつもりで来ます」

川浪はどうかそつのない返事をして、音大の正門前で新山に別れを告げた。

6

その再来週の火曜日が来た。川浪と新山は鬼子母神で落ち合い、そこから不忍通りに出て、人通りの少ない緩やかな下り坂を護国寺に向かってゆっくりと歩いていた。

「今日は護国寺に案内していただけるということですが、新山さんは散歩がてらお参りしたりするんですか」

「護国寺ってとっても静かな場所でしょ。ですから気分転換に年に数回ほどお参りさせていたでいます。今日は川浪先生を歴史上の人物のお墓にご案内しますわ。富田鐵之助という方のお墓ですけど、日本銀行第二代総裁を務めた方なんです」

川浪は富田についてまったく知らなかった。しかし新山の様子から現在の自分たちに何らかの示唆を与えてくれる人物らしいと見当をつけた。新山が続けて言った。

「川浪先生、本当は迷ってらっしゃるんじゃないですか？わたしたち、この年齢で一緒になる必要があるのかって。もしうまく行かないってわかったら別れればいいんだけど、そんな時間も労力も費やすだけ煩わしいって。だからこのまま別れた方がお互いにはいいのかなって」

川浪は「別れた方がお互いにはいい」ということばに戸惑った。見合いに対する自分の思い入れをはぐらかされたように感じたからだ。気恥ずかしく思い、自分は見合いに前のめりなわけではないと年甲斐もなく見栄を張る気になった。新山の気分を損ねないようにしたかったが、ことばを選ぶ余裕はなく、思いつくままことばを繰り返していた。

「新山さんはいつも単刀直入なんだなあ。じゃ、私も率直に言いますね。実はおっしゃる通りなんです。私が新山さんの人生と接点を持つことで、新山さんと自分の人生に無用な煩いの種を持ち込んでしまうんじゃないかって、なんかそういう懸念を捨てきれないんです」

「『無用な煩いの種』って、例えばどんなことですか」

「最近では老齢になっても新しい経験を求めることが前向きな生き方って言われてますよね。でも、私は若い時分の経験を思い出して過ごすのも、意味のある人生の過ごし方じゃないかなって思うんです。私たちに即して言えば、新しい異性と会って再婚をめざすんじゃなくて、若い頃の恋愛を思い出して味わい直す、それだって意味のある生き方だって思うんですよ。新しい異性と結ばれることを目指すだけが前向きだなんて、婚活業者が煽^{あお}ってるだけなんじゃないかなあ」

川浪は見合いに必ずしも前のめりでないように見せるにはうまい話題を持ち出せたと思った。一方、新山は並んで歩きながら黙って話を聞いていたが、少し考えてから質問をしてきた。「でも、昔の恋は終わってて、そのことはもう変わりようがないですよ。それを思い出して過ごすだけって、やっぱり単なる後ろ向きの生き方に思えてしまいますわ」

「確かにそんな風にも見えるでしょうね。でも、過去の体験を反芻^{あお}するって、自分の生き方と

あらためて向き合うことにもなるんじゃないかな。だから…その恋愛で言ったことば、した行い、それ自体は変わらないし、変えようもないけれど、思い出してあらためて向き合うと、当時は見えなかった人間関係や出来事の意味合いがあらためて分かったりして新しい世界が見えてくる…だから、やっぱり新しい経験をしていることになるんじゃないかなって思うんです」

「ええ、ですけれど新しい異性との出会いはすべてが新しい経験ばかりでしょ。なので気力も体力も要って、歳をとると億劫って思えるんじゃないありません？それで昔の回想にいろいろ意味付けして、それだけでもういいやって、そんな風に思ってるんじゃないありません？」

話が折り合わず二人はやや重い気分で護国寺に着いた。参道を見遣ると中央に壮麗な山門が聳え立っていた。仰ぎ見ながら二人はその門を通り抜け、急な石段を登って更に門をくぐると、本堂の堂々とした構えが目に入った。ゆっくりと石畳を歩いて本堂の手前まで進み、再び緩い石段を上がると、ようやく入口にたどり着いた。戸は大きく左右に開け放たれていて、二人はそこに並んで立ち、本堂奥の薄暗い祭壇をそっとうかがった。本尊の如意輪観世音菩薩像を納めた黒光りのする厨子が厳かに祀られていた。二人は恭しく頭を垂れて合掌した。

7

お参りがすむと新山がそれとはなしに川浪の手を取った。その仕草があまりにも自然だったので川浪も思わず新山の手を軽く握り返していた。二人は手をつないで本堂の石段を降り、墓地に続く道に出た。手をつないだまましばらく家々の墓標を見て歩き、ある墓の前に来ると、新山が川浪を見やって微笑みながら口を開いた。

「こちらです。ここが富田鐵之助のお墓ですの」

そこは広い敷地ではないが、左右に一基ずつ石灯籠があり、左に分厚い石の墓誌、右に一体の地蔵が立つ重厚な印象の墓所であった。新山が墓所に上がる石段の前で語り始めた。

「富田は勝海舟の長男小鹿のアメリカ留学に随行した人で、維新後は森有礼の部下として活躍しました。また富田はあの福沢諭吉とも親しくしていて、その縁もあって、福沢邸で杉田玄白のひ孫杉田縫と結婚してるんです。確か明治七年十月四日でしたわ。で、その時、福沢と森が見守る中で新郎新婦が『婚姻契約書』を取り交わしますけど、このことで結局日本での契約結婚第一号になるんです」

川浪は新山の説明を聞きながら心を動かされていた。新山が自分との交際を真剣に考えて、この交際について二人が思いを深めることができるよう、いろいろと材料を揃えてくれているように思えたからだ。川浪は新山が真剣にこの見合いをいきつくところまで行こうとしていることを感じ取り、この見合いの前後に自分が感じたことや考えたことを今一度振り返った。

川浪は若い頃高齢者の男女交際を「年甲斐もない」とか「醜悪」と言って冷笑し、高齢者に対する無理解と偏見を正さずに今日に至っていた。今、自分が高齢になり、新山と会ってみると、自分の中にも異性への憧れや欲望がなお歴然とあることを悟らされ、忸怩たる思いで胸が一杯になっていた。川浪は深い悔恨の思いにかられ、偏見に染まっていた自分の罪を償いたいと思った。また、新山の誠実さに報いるために、これからは素直な気持ちで新山に接して、この

見合いが成婚につながるよう思い切って一步踏み出そうと殊勝な気持ちにもなった。

川浪は富田の墓所の敷地に歩み入ると、墓石の前で深く一礼し合掌した。そして新山を横に引き寄せて、一緒に並んでもう一度合掌した。二人で冥福の祈りを済ませると、川浪は先程思い至った結論を口にした。

「新山さん、新山登志子さん。ここに案内してくださってありがとうございます。新山さんの思いがまっすぐに伝わってきました。私も新山さんと同じ気持ちです。アンドロギュノスの二つに引き裂かれた半身が私の場合は新山さんなんだと思う。ありのままの自分をそのまま受け入れてもらえる人が新山さんなんだと思います」

「まあ、そんな風におっしゃっていただけると嬉しいわ。でも、早合点しないでください。わたしは川浪先生のこと、引き裂かれたわたしの半身ってまだ思えないんです」

そう言われて川浪はびっくりし、目を白黒させた。これまでの話の内容や手をつないでくる態度から、新山は自分に好意を抱いていて、この見合い話に乗り気であるとすっかり思い込んでいたからだ。新山がことばを更に続けた。

「世間の男女にはよくあることって聞いてますけど…年配の男性、いえ、一般に男性ってことですけど、女性から敬意をもって接してもらおうと、その敬意を好意と取り違えて、自分たちが相思相愛って思いがちなんだそうです。でも実際は、女性が自分の役割は介護職って心得ていて、男性が気分がよくなるように精神的介護を施しているだけなんです。わたしたちはこうして本音でお話ができますから、お互いそんな誤解をしてしまう心配はありませんけど」

この発言は川浪には一層衝撃だった。新山のこれまでの好意的言辞や態度が本当のところは自分に対する精神的介護だと言っているからだ。だとすると、川浪は喜劇のピエロを演じさせられているようでできまりが悪く、腹も立った。しかし、狼狽や怒りを顔に出したりすれば、それはバカの上塗りになると気が付いて、かろうじて次のように返した。

「あはははっ、精神的介護かあ、うまいこと言うなあ、新山さんは。男たるもの、歳がたって女性にポピュラーになるなんて、まずあり得ないと心しなければいけないよねえ、まったく…」

この気まずい遣り取りをした後、二人は富田の墓所を出て、しばらく口をきかずに墓地を散策した。二人はもう手をつないでいなかった。川浪はついさっき「これからは素直に接しよう」と殊勝な気持ちになったことを莫大な損をしたように思い、かなり不機嫌になっていた。

8

子爵や男爵と彫刻された立派な墓石が並ぶ一画を通り、護国寺の墓地のやや奥まった一画にやって来た時、新山が立ち止まった。そこは左右に石灯籠を二基ずつ配し中央に堂々とした墓標が立つ墓だった。墓石には「従三位勲三等下田歌子墓」と彫刻されていた。

「川浪先生、下田歌子という女性をご存知ですか」

新山が口を切った。

「意外かもしれませんが、知ってます。いやあ、ここにあったんですね、下田歌子のお墓は。実は母が実践高等女学校の卒業生で、晩年の下田歌子の警咳けいがいに接してるんですよ。下田先生のこと

とは母がよく話してくれました。心から敬愛していましたね、下田先生のことは」

下田歌子は明治天皇の皇后に仕えた女官で、その歌才ゆえに皇后から歌子と名乗るように言われた人であった。宮中を辞した後は現在の実践女子学園の前身にあたる実践女学校を創立し、日本の女子教育の先駆者となった。川浪は母親からその下田歌子の話を耳にタコができるほど聞かされていたのである。

「まあ、お母さまが実践の卒業生でしたの。しかも直接下田歌子に習ったなんて素敵。川浪先生を見てると実践を出た方が育てたって、何となく分かりますわ」

「えっ、どういう意味ですか」

「椿山荘のティールームで紅茶とチーズケーキをいただいた時に気が付いたんですけど、なんかとても折り目正しい召し上がり方をされてて感心したんです。特別な作法じゃないんだけど、ケーキへのナイフ替わりのフォークの入れ方とか、とても優雅で折り目正しいって感じでしたわ。それって良妻賢母教育を受けた女性が子供に身に付けさせるマナーみたいなもので、今にして思えば、いかにも実践高等女学校の教育の成果っていう気がしますもの」

「特別なマナーは母からは何も言われたことはないんだけどなあ。ただ、残さずに食べたり、食べ散らかさないできれいに食べると褒めてくれましたね」

「お母さまの教育方針がよくわかりますわ。よくできていることを褒めるんです。押し付けたり、叱ったりせずに、よくできたことを褒める、これって教育の基本ですよね」

川浪はこの話の内容も新山に精神的介護を施されているのかと疑ったが、母親の出た学校や母親の教育を賛美してもらおうと嬉しくなり、先ほどまでの不機嫌がどこかへ飛んでしまった。

「ところでなぜ下田歌子のお墓に案内して下さったんですか」

「川浪先生とわたしが最初にお会いした時、川浪先生が奥様に言われたことを話して下さったでしょ。それに関係があります」

「結婚が破綻した原因を話した時のことですね。妻は『あなたは女を理想化するので、もうついていけない』と言ったんだけど、私は『その意味が未だに分からない』って言いましたよね」

「そう、そのお話をうかがって、川浪先生が理想として描く女性像ってどのようなものか考えたんです。殿方の場合、人生最初の恋人は母親のことが多いので、川浪先生もお母さまに似た女性が理想なんじゃないかって思ったんです。別にマザコンのことを言ってるんじゃないですよ。男性の一番身近にいる女性、つまり母親ですが、その立ち居振る舞いやものの感じ方が、その男性が女性を見るとき基準になるってよくあることじゃないですか。ですから川浪先生の女性を見る目も知らず知らずにお母さまが基準となっていたんじゃないかって思ったんです」

「おっしゃることはよくわかります。つまり、私が妻と母をいつも比較していたってことになるんですか」

「そうですね。お母さまがあるべき女性像で奥様はご自分をその姿にできるだけ近づけるように陰に陽に夫から求められてるって感じてたんじゃないかしら」

そう新山に指摘されて川浪は別れた妻の悩みをやっと理解できた気になった。しかし川浪に

してみれば、母親が同性には厳しい眼差しを向けるのを知っていたので、その母の眼差しから妻を随分とかばっていたつもりではあったのだ。でも、そもそも妻を見る自分の眼差しそのものが実は母親と同質のものだという自覚がなかったことに今更ながら気が付いたのであった。

「言われてみると、そうかもしれないな。そうだとすると妻は夫の期待や思惑をいつも気にしてて、ありのままの自分を出して、それを受け入れてもらうっていう魂のやすらぎを味わえる瞬間がなかったっていうことなんでしょうね。夫つまりは他人の視線をいつも気にしていて、疲れてしまった……」

「勝手な推測をして失礼とは思いますが、そのように見えますね。ところで、下田歌子のお墓にご案内した理由ですけど、歌子はわたしが理想とする女性の一人なので是非ご紹介したかったんです」

「あっ、そうか、私の理想とする女性像を知るために、まず新山さん自身が理想とする女性の下田歌子を私に紹介するつもりだったんですね」

「そうですね。そしたら川浪先生のお母さまが下田歌子本人を直接に知ってらして驚きました。で、その下田歌子ですけど、わたしの心の中では、彼女は家庭人としても職業人としても全力で人生を生き切った素晴らしい女性なんです。歌子は二十五歳で結婚しますが、夫がすぐに病に斃^{たお}れてしまい、結婚生活の大半を看病に明け暮れました。でも、自己研鑽を怠るようなことはなく、夫を看取った後は、女性の自立を助けるために学校を創って女子教育に全力を尽くしたんです。時代の制約もあって、それが良妻賢母を育成するための教育になってしまいましたけど、下田歌子は夫や子供に盲目的に滅私奉公することが良妻賢母になる道だなんて一言も言っていないんです」

「そう思います。母を見ていても、夫や子供に実に献身的で自己犠牲的だったけど、決して無批判に夫や子供に滅私奉公するっていうんじゃないかったですよ。事の経緯をしっかりと見た上で、言うべきことは言って、よりよい結果を産み出そうって一生懸命でしたね」

「そうですね、きっとそうでしたでしょうね。それにしても川浪先生のお母様が下田歌子の教え子だったなんて、本当にくすしき縁^{えにし}ですね」

二人は下田歌子の墓にお参りして山門まで戻り、川浪は仕事で大学に行くので不忍通りに面した地下鉄護国寺駅へ降りる階段入口で新山と別れた。

9

護国寺から帰って以来、川浪は新山登志子から言われたことばの意味を考えていた。それは「精神的介護」ということばであった。会話の中では「心遣い、気配り」という意味で使われていたが、そのことばの含意はもっと深いものがあるように感じられたのだ。丁度昨夜、瀬川教授からこの見合いの件、どのような進展があったのか続報を聞きたいとメールで連絡があった。それもあって川浪は今日瀬川の研究室に行き、報告がてらこのことばの意味について彼の意見を聞いてみようと思った。

「川浪先生、わざわざ来ていただいてすみません。どうですか、新山さんとは話がありますか」

瀬川は学生指導用長テーブルの前に座った川浪にあいさつもそこそこに尋ねた。

「うん、あいますね。新山さんは自分の意見を単刀直入に話してくれて時間を浪費することがないんです。だから、私も大いに助かってます」

「そうでしたか。それを聞いて安心しました。新山さんから直に聞いたかもしれませんが、彼女が単刀直入にはっきりした物言いをするのは結婚生活で苦労したかららしいですね」

「その辺の事情は特に聞いてはいないんですが、どんなご苦労があったんですか」

「うーん、腹を割って話せないっていうか。別れた旦那さんには不満があっても口には出さないし、旦那さんの素行に疑念があっても決して聞き質さなかつたそうですね。つまり本音を伝えないし、言うこともできないでいたんだそうです。で、結果として二人の関係のほころびをみすみす広げてしまって、そんな反省があるみたいなんですね」

川浪は瀬川の解説を聞いて、新山が辿った心の軌跡をあらためて追認することができ、瀬川を訪ねて正解だったと思った。

「なるほど。それでいろいろはっきり言ってきたんですね。二回目のデートでしたが、彼女と私は波長が合うから、互いの自宅を訪問し合い、食事をしたりして、その後は訪ねた方が自宅に帰るっていうお付き合いはどうかって、そんな提案をしてきたんですよ」

「それって起居を共にしないってことですか。でも、生計は一つにするん…ですよ？もし一だったら、それは夫婦ですね。変だけど、別居している仲良し夫婦かな。でも、一つにしない一だったら、それは…友達以上の…恋人、いや、やっぱりただの茶飲み友達ってことかなあ」

瀬川は川浪から新山の言い分を聞いて、その意味をこのように解釈してみせたが、真意は掴めないようであった。川浪はすぐに自分の説明不足に気が付いて急いで補足した。

「あっ、すみません。説明不足でした。結婚の形の話じゃなくて、デートの仕方の話なんです。でも二回目のデートでずいぶん踏み込んだ話をしてくれてますよね。それですっかり嬉しくなると、三回目のデートでは、私から『新山さんが私のベターハーフに思える』って言ったら、新山さんは自分はまだ私のことを同じようには思えないってはっきり言ってきたんです。もうっ、びっくりしたし、第一きまりが悪かったですよ」

「やっ、さすが、さすが川浪先生。速攻ですねえ。でも、あまり急いで事は仕損じますよ」

「いえ、いえ、そんな速攻だなんて。ところで、その三回目のデートでは護国寺に行ったんですが、新山さんに富田鐵之助という人の墓に案内されたんです。その人は日本銀行第二代総裁だった人で日本での契約結婚第一号だと説明してくれました。あっ、これは私も理解しました。一緒になるなら、事前に財産管理や家事分担のことなどちゃんと契約書に書いてはっきりしておこうっていう意思表示だと思ったんです」

「いやあ、速い展開ですね。実に速い。いい感じじゃないですか、川浪先生」

デートでの出来事をあらかじめ説明したので、川浪は心にかかっている新山から言われたことばの意味について瀬川に尋ねた。

「瀬川先生、実はまだ他にも気になることを言われたんですよ。年配の男は女性に敬意をもつ

て接してもらおうと、その敬意を好意と誤解するっていう話なんです。それは女が自分の役割を介護職と心得てるから、年配の男が、それってつまり私のことなんです、気分が良くなるように精神的介護を施しているだけだって言うんです。いやあ、冷水^{ひやみず}を浴びせられた気になりましたね…『心遣い』じゃなくて『精神的介護』って言うんですから。言い得て妙なんです、瀬川先生、この『精神的介護』ってことば、何か含みがあるんでしょうか」

瀬川は川浪から質問を受けてしばらく黙考してから次のように答えた。

「……確かに言い得て妙ですね。介護という和普通は体の不自由な人の食事や入浴、排泄の時に身体的介助をすることを言いますよね。うーん、新山さんは聡明な人だからなあ。高齢者の見合いで頭に入れておくべきこと…一緒に暮らしてから余り時間がたたないうちにどちらかが身体的介護が必要になる場合があるってことかな…そのことをそれとなく伝えたい思いがあるんじゃないでしょうか。新山さんはそこを露骨に言わないで、精神的介護ということばで暗示したとも考えられますね。まあ、あくまでも深読みをすればの話ですが」

「なるほど、年齢的には健康でいられる時間も限られているわけですからね……精神的介護も身体的介護もよくよく考慮しておくべきことですよ。なるほど、なるほど」

川浪は瀬川に指摘された解釈に深く納得した。丁度その時授業の開始を告げるチャイムが鳴り、それを潮^{しほ}に川浪は瀬川の研究室を辞した。

10

護国寺でのデートから二週間後の火曜日の午後、川浪と新山は目白駅前の珈琲店で黒光りのする古めかしい英国風調度に囲まれて店主の淹^いれたキリマンジャロを飲みながら話していた。

「瀬川先生が私たちのことを心配してるんで報告がてら彼の研究室に行って、お話をききましたよ。新山さんに案内してもらった護国寺のお墓のことなんかですけど」

「まあ、心配してるって、どんなことが心配なのかしら。わたしが川浪先生に無理難題を吹っかけて困らせていやしまいかってことかしら。わたし、意見は言ってますけど、何かをして欲しいなんて要求したり、難題を持ち出したりしてませんよね」

新山からは確かに何も要求されてはいなかった。しかし新山の発言を聞いていると、新山の性格と思想が明確に伝わってきて、川浪はその一言一句を子細に吟味せざるを得ないのだった。

「この間、新山さん、おっしゃってましたよね。『女は年長の男性には精神的介護を施している』って。振り返ってみると、確かにその通りなんです。女性との会話では自分が介護されることに気が付かないで、いい気になってたことに思い当たり、きまりが悪くなりましたよ。それに新山さんが『心遣い』じゃなくて『精神的介護』って言ってくれたおかげで、こんなことも考えたんです。ことばで介護されているうちはまだいいんだ。そのうち身体的介護が必要になることだってあるんだぞって」

「まあ、そうでしたの。深くは考えずに口にしたことばでしたけど、大事なことを考えてくださったんですね。わたしたちの年代では、男性も女性もお付き合いするなら、ゆくゆくは互いに介護する側される側になるってことを頭に入れておかななくてはいけないですもんね」

「いつ健康を損ねるか分からないですからね。もしかすると明日にでも介護が必要になるかも……なんか深刻な話になっちゃったなあ」

「でも、かなり本質的なことをお話してる気がしますわ。熟年世代の婚活って結局は互いの精神的、身体的介護ヘルパーを探すことって言っても極端に的外れって思えませんもの」

川浪は話が身も蓋もない内容になったのでさわやかな気持ちになれる話題を探そうとコーヒーを一口飲んだ。すると同じ思いでいたのか新山が新たな話題を振ってきた。

「川浪先生、サンテクジュベリのことばに『愛は互いを見つめ合うのではなく、ともに同じ方向を見つめることである』というのがあったでしょ。わたし、このことばの意味、よく分からないんです」

「あっ、ありましたね。うーん、なるほど、このことばは確かに難しいなあ……ことばって誰に向けて言ってるのかを考えると意味が分かってくるんですね。ということは、このことばは若い恋人たちへのことばなのか、それとも経験を重ねた年配のカップルへ向けたことばなのか、うーん……この辺のところ新山さんはどう思ってますか」

「わっ、難しいわ。これって前半は若い恋人たち、あるいは新婚早々の人の行動ですよ、互いを見つめ合うんだから。でも結婚したら見つめ合ってばかりはいられませんものね…生活を維持していくには二人で共通の目標に向かって淡々と日々を送っていかなくちゃならない、それが二人にできれば、二人は真実の愛を育んでいる、なんか、そんなことを言いたいんじゃないかしら」

「なるほど、美しい解釈だな。しかも一理も二理もある。納得しました」

「そんなにすぐに納得しないでもう少し解説していただけます。わたし、まだわからない」

「私のは新山さんの解釈と結局は同じなんですけど……サンテクジュベリには多分『真実の愛は一時的なものじゃなくて永続的なものだ』っていう信念があったと思うんです。とすれば、互いを見つめ合う二人は単にのほせあがってるだけで、その愛は一時のもので、真の愛じゃない。対して、同じ目標を見つめる二人は人生の風雪を乗り越えて行こうと思ひ、それに必要な愛を育んでいる。だから、その愛は永続的で、真の愛なんだ…そう言いたいんじゃないのかなあ」

「真実の愛は永続的なもの…なのね。そしてその愛は二人で風雪を乗り越える中で育まれるんですね…」

新山は考え深げにコーヒーカップを見つめて言い、更に言い足した。

「結婚って、縁あって出会った二人が苦楽をともにして二人の関係を深めていくじゃないですか。その過程で互いへの強い信頼が生まれ、一時的だった愛が永続的なものになっていきますよね。でも、熟年から始めるお付き合いって、二人の関係を深める時間が余りない中でいろんなことを決断していかなくてはならないでしょ。うーん、川浪先生はわたしと会ってお話して、この短い時間の中でどんなふうになんかのことを判断されてるんですか」

川浪は核心に迫る質問を突然振られて慌てたが、新山のこのような話しぶりにも慣れてきたので何とかことばを紡ぎ出した。

「前にも言いましたけど、アンドロギュノスの二つに裂かれた半身が私の場合は新山さんなんだと思ってます。でも、正直に言えば、こんなに短い期間に三回会っただけでそこまで判断できてはいません。とは言え、時間に限りがある身としては、ある程度気が合うことを確認したら思い切って一歩踏み出す方がいいと思ったんです」

「つまり一か八かの賭けてことね。でも、負けたらどうするんですか」

「負けてもかまわない。哲学者になるだけですから」

「あっ、それ、ソクラテスでしょ。たまたま知ってたわ。彼は『とにかく結婚しなさい。もし良妻を得れば幸福になれる。悪妻なら哲学者になれる』って言ったんですよ」

「さすが、さすが新山さんだなあ。打てば響くような反応が返ってきて、その刺激でこちらの精神もすごく活性化します。新しい考えが次々に湧いてきていつも本当に楽しくなるなあ」

老齢期の婚活について身も蓋もない話をした後、何とか笑い合える内容の会話になったのを潮に、川浪も新山も今日はこれで打ち上げようと思った。珈琲店に入店して一時間と少し経過していた。

「川浪先生、この次お会いするのは少し先になりますね。生徒たちに期末試験対策をしてあげなくちゃなりませんから。なので、また二週間先の火曜日でいいかしら。その時まで梅雨が明けていればいいんですけど」

「了解しました。私の方も七月末には前期試験をしなければならないんです。早めに作問してちゃんと時間が取れるよう準備しておきます。梅雨明けして、その日晴れてるといいなあ」

次回の逢瀬の日取りを決めて、二人は目白駅前別れた。

11

約束の火曜日になった。しかし、まだ梅雨は明けていなかった。川浪は新山と目白駅改札口で待ち合わせ、そこから徒歩十分ほどのところにある自由学園明日館^{みょうじち}に新山の案内で向かった。幸い雨の止み間で傘をささずに歩くことができた。

「自由学園は千九百二十一年の創立だから丁度今年で百周年なんですね。明日館ってとても美しい落ち着いた建物ですわ。創立者の羽仁もと子^{よしかず}、吉一夫妻の教育理念に共鳴して、あのフランク・ロイド・ライトが設計してくれたんですって」

明日館に着くと、二人はまず施設の見学をした。大きな窓からさんさんと光が差し込む広めの教室と整然と並んだ木製の学習机や椅子を見た後、併設の天井の高い喫茶室に落ち着いた。

「百年たってるのに少しも古い感じがしないなあ。むしろ何もかもが新しい。ところで、羽仁夫妻の教育理念って、どんなものだったんですか。校訓などに謳^{うた}ってあるんですか」

「『生活即教育』という理念なんですけど、『思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ』っていう標語になってますね」

「『祈りつつ』って、なんかいいなあ。これがキリスト教主義なんですね。私自身はどの宗教の信者でもないけれど、祈りを捧げている人は、どの宗教の人でも美しいって思いますね」

「わたしも特に信心深いわけじゃありませんけど『祈り』ってことばは好きです。それに祈る

人って本当に美しいですよ。祈る人って、望みや願いを叶えたい一心でできることはすべてした上で、し残したことが一つもないって確認して、その次に、つまり最後に『祈る』んだと思うんです。そこに来るまでに自分の力がいかに小さいかが分かってるから、慎ましく^{うやうや}恭しく聖なるものに^{こぶ}頭を垂れる。だから祈る人の姿^{こうこう}って神々しくて美しいんじゃないかしら」

川浪はこの遣り取りを聞いてあらためて新山登志子という女性を好ましく思った。自分の気持ちを一生懸命にことばに移しかえている新山の一途な表情を見て、とてもとても美しく神々しいと思った。

川浪は新山への好意をどのように口にすべきか考えて紅茶を一口飲み、しばし沈黙した。すると新山の静かな声が聞こえてきた。見ると新山がまっすぐに川浪を見つめて話していた。

「わたしたち今日で五回目のデートですよ。この間お別れ^{あいだ}してから考えてたんですけど、そして前にも申しあげましたが、わたしたち、当分はこうして外でお会いして、いろいろお話することでもいいと思うんです…自分の気持ちや考えを率直に話せる人って、わたし、同性でもあまりいません。まして男性は皆無です。でも、瀬川君からいい人がいるから会ってみないかって言われて、川浪先生にお会いして、今日までこうしてお付き合いいただいています。瀬川君は再婚相手として考えるようにと言ったんですけど、婚姻制度という形にとられると、わたしたちの年代の人は失うものがありすぎるんじゃないかって思うんです」

川浪は同じことを言われた時のことをよく憶えていた。しかし、同じことばでも今日のはまったく別の意味を持つことばだと思った。要するに、再婚相手としては振られたと思ったのだ。

「今日、私はプロポーズしようかなって出がけに思ってここに来たんです。でも、だめですか。いやあ、そうですよね。やっぱり私じゃだめですよ」

「川浪先生、誤解しないで。わたし、川浪先生のこと大好きです。四十代、いえっ、五十代でもお会いしていたら、まちがいなく先生のプロポーズを受けてます。いえっ、わたしの方から押しかけて結婚しますわ。でも、わたしたちの年代で婚姻制度という形にとられると、本来は自分から進んで負うべき義務や責任をお互いに押し付けてしまうって思うんです。わたし、それが嫌なんです」

「自分から進んで負うべき義務や責任というと、例の介護なんかのこと？」

「前に挙げた例は介護でしたわね。じゃ、介護のことでお話しますが、夫や妻の介護は義務でするんじゃないくて、夫婦が互いへの敬愛の情に促されてする、つまり自発的にする行為って思うんです。でも、そこまで関係を深める時間が十分にない夫婦、熟年結婚する夫婦はそうなりがちですけど、そういう人たちがただ夫婦っていうだけで義務だから介護すべしって言われたら、その夫も妻もお気の毒って思うんです。愛も覚悟もそこまで固まってないんですから。わたし、川浪先生をそのような境遇には置きたくないんです」

新山の声は静かであったが、表情には悲痛ともいえる真剣^{まけん}さが滲んでいた。川浪は新山の瞳を見つめ、新山のことばに嘘はないと思った。その瞳には自分の顔がはっきりと映っていたからだ。

「相手には将来への保障も担保もとらないで、そして見返りも求めないで結婚し、どちらかに介護の必要が生じたら自発的に手を差し伸べる、それが夫婦なんですよ。そうあるべきなんですよ。でも、それを夫婦になろうとするすべての人に求めるのは、やはり現実的ではないんでしょうね。今新山さんに言われて、自分のことを反省してみたんだけど、健康のことを考えれば、人に介護してもらう可能性は私の場合とても高いんです。持病も抱えてるし簡単にプロポーズしていい身体からだじゃないってことを思い出しました。しかし、私が新山さんにプロポーズしたい気持ちはどうしても抑えられない。だって登志子さんが大好きだから。でも、それでも、このままこうして外でお会いし、いろいろお話してお互いの精神生活を豊かに、そして楽しいものにして暮らしていくのが無理のない最も賢明な選択なんだろうなあ。やっぱりそうなんじゃないですか」

川浪はこれだけのことを失恋した時のようなやや悲しい気持ちで述べた。しかし、言い終わってから、肩から重い荷を下ろした時のようなほっとしている自分がいることにも気が付いたのだった。

「川浪先生、わたしたちが出した今後の方針、瀬川君にもお伝えしたいって思うんですけど、どうします」

「うん、そうですね…早い方がいいでしょうね…そうだ、私たち二人が今度瀬川先生を招待したらどうでしょうか。もしそれでよければ、彼に都合のつく日を何日か言ってもらいます」

明日館の喫茶室で向かい合う川浪博と新山登志子の間にはもはや気まずい空気はいささかも流れていなかった。

つづく

参考文献：

高橋秀悦(2016)：「富田鐵之助のニューヨーク副領事就任と結婚と商法講習所——『海舟日記』に見る『忘れられた元日銀総裁』富田鐵之助(6)」東北学院大学経済学論集187号：15-92